

## 地域に生きる博物館

徳島博物館研究会編  
 教育出版センター 2002. 3  
 327p 21cm 2,800円 (本体)

本書は徳島博物館研究会の皆さんの論考集である。同研究会の結成は「(博物館冬の時代にあつて) 博物館専門職員である学芸員が自らの哲学を構築し、これからの博物館のあり方を探っていくことが不可欠」(刊行にあつて)との発意からなされたもので、「これは博物館のみならず、かなり普遍的な広がりをもつであろう」(同上)という認識から、構成員は博物館学芸員のみならず、文書館や図書館の専門職員や博物館に勤務した経験のある教員等にまで及んでいる。本書の内容が様々な切り口から多義に亘っているのは、そのためである。

「博物館学関係図書の刊行がはやる昨今ではあるが、博物館に関わるナマの声が公にされることがけっして多くはない」(同上)というくらいは確かにあり<sup>(1)</sup>、そうした意味からも、本書の刊行は博物館のみならず、専門的な職種にある現場の担当者にとって、種々の問題点を再認識するための縁となるものと言えよう。

本書の構成は3部構成になっており、内容は次のとおり。

- I 博物館の広がり—対話と連携の試み—  
 地域博物館ネットワーク構築の必要性  
 (松下師一) ユニバーシティ・ミュージ

アム構想と大学総合博物館(平井松午) 来館者との交流空間としての展示室(郡司早直) 博物館と学校教育(結城孝典) 文書館と博物館の間(金原祐樹) 公共図書館における集会・文化事業について(梶谷純一)

## II 博物館の組織と学芸員

博物館の学芸組織に関する一考察(両角芳郎) 博物館実習と学芸員養成に関する覚書(須藤茂樹) 総合博物館の中の自然史(大原賢二) 総合博物館における研究(鎌田麿人)

## III 博物館資料をめぐる諸課題

博物画と博物館(亀井節夫) 博物館施設における燻蒸をめぐる課題と展望(魚島純一) 博物館資料目録のもう一つの読み方(福田珠己) 資料整理・登録の方法(中尾賢一) 博物館における生物の差別的和名の使用(佐藤陽一) 博物館における展示と部落問題(長谷川賢二) 図書館の自由宣言成立についてのメモ(新孝一)

特別寄稿 わが雑芸員物語(天羽利夫)

I部、松下氏(町立博物館学芸員)の論考では、バブル崩壊後の「博物館冬の時代」にあっての『春』の訪れを期待させる『兆し』として、①総合的な学習の時間の受け皿、②主婦層やシルバー世代を中心とした生涯学習熱の高まり、③インターネットに代表される情報化社会の発展を挙げ、小規模博物館においても、状況に対する理念の確立と積極的な対応を促している。また、最後に近年の市町村合併に触れ、「社会教育施設や文化保護施設というものは、単に効率化だけをめざし、施設を統廃合してゆけばよいというものではない。子ども、高齢者、障害者、車を運転できない人といった『交通弱者』も大切な地域住民であり、むしろ主要な市町村立博物館の利用者なのである。こうした『弱者』に配慮した生涯学習政策・社会教育施策こそ、合併後の新自治体は大切にしたいと念願する」と結んでいる。

平井氏(大学教員)の論考は近年注目されている「大学博物館」について具体例を交えた動きを紹介する一方、「国立大学法人化を間近に控え、今後、大学・学部の再編・統合やそれにとまなう施設改修などにより、貴重な学術標本・資料が四散することも大いに危惧される」と警鐘も鳴らす。

郡司氏(町立博物館学芸員)の論考では、「博物館教育者としての学芸員」について、研究分野としての開拓の必要性を述べる。

結城氏(教員・文化行政担当)の論考では、博物館と学校現場との連携について、「お互いの組織としての目標を実現していくために積極的に取り組むひとつの選択肢」であり「お互いに主体性を持ち理解しあつた上で、連携がなされていかなければならない」と述べる。

金原氏(文書館担当者)の論考では、文書館と博物館との違いを確認した上での連携について述べ、図書館も含め、相互の資料を利用し合った「展示」の有効性について示唆する。

梶谷氏(高校教員・元図書館員)の論考では、公共図書館における展示等「集会・文化事業」の位置付けについて歴史的経過とあり方を述べ、「公共図書館は、ただ本を貸すだけの機関であって良いのか。司書は貸出作業のみ追われていて良いのだろうか」と現状に対する危惧を漏らす。

II部・III部の論考については個々には触れないが、学芸員の専門性の問題、「研究」との兼ね合い、まさにいま現在の話題である「燻蒸」の問題、現場でしばしば話題になる、モノ資料の分類(目録化)の問題など、筆者自身も博物館の現場に来て、早々に出くわした種々の問題についての論考が続いている。

その中で特筆すべきは、長谷川氏(県立博物館学芸員)がその論考で、「部落問題」を切り口に、改めて「地域」と「館・学芸員の姿勢」について問うている点であろう。現場にとっては極めてセンシティブな問題を扱うことで、現在の日本の博物館のスタンスが浮き

彫りになり、これは文書館・図書館にとっても他人ごとではない。氏はおわりに、「部落問題関係資料を扱う展示をめぐっては、考えるべきことが少なくない。『地域に生きる博物館』であろうとするなら、その点、大いに苦悩すべきであるし、そうでなければ前進はないと思うのである」と述べ、「議論と実践を試みる姿勢を失うべきではない」と締めくくる。

氏の論考中では「部落問題」に収斂するかたちでの問題提起となっているが、ことはそれだけに留まらず、ひろく地域の「諸課題」に及ぶべきことは、氏も冒頭で述べているとおりである。「地域博物館」や「地域文書館」という言われ方がされ出して久しいが、「地域に存在すること」以上の積極的な意味づけがどこまでなされているのか、はなはだ疑問な呼称の使われ方も見られる。そうした中で、本書があえて「地域に生きる」と銘打った自負と「冬の時代」に対する前向きな姿勢に、改めて拍手を送りたい。

この書に触発されて、多くの「地域」でこうした試みが積み重ねられ、類縁分野の「専門性」の底上げが図られていくことを期待して本書の紹介としたい。

#### 注

- (1) 「ナマの声」という意味で、管見では、歴史学と博物館のありかたを考える会『現場から（同会設立十周年記念誌）』（2001. 3 158P 同会発行）がある。

細井 守・藤沢市教育委員会生涯学習課博物館準備担当